

## 「北海道 150 年事業基本方針（原案）」への意見募集結果

### 1 意見募集の概要

2018 年（平成 30 年）に、本道が「北海道」と命名されてから 150 年目の節目を迎えるに当たり、北海道 150 年道民検討会議（委員長：北海道大学総長 山口佳三）で策定を進めている「北海道 150 年事業基本方針（原案）」に対するご意見を募集し、ご意見の趣旨を今後の策定作業に反映するもの。

### 2 意見募集期間

平成 28 年 8 月 9 日（火）～平成 28 年 8 月 31 日（水）

### 3 意見募集結果

次のとおりご意見の提出があった。

区 分	提出者数	提出意見数
個 人	11	16
団 体	4	4

### 4 ご意見の概要

基本方針（原案） 掲載箇所	ご意見の概要
4 頁 Ⅱ.北海道みらい 事業	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「北海道」の見つめ直しと継承 <ul style="list-style-type: none"> <li>・開拓期の歴史（お雇い外国人や移住者の視点等）の情報発信</li> </ul> </li> </ul> <p>平成 3 年～4 年に向け、NHK で放送されたドラマ「新十津川物語」の再放送。本テーマである開拓の歴史を伝えるための情報発信媒体として、有効な手段である。</p>
6 頁 Ⅲ. 関連推進施策	<p>道民生活に深く関わる道有財産の維持管理施策・事業も盛り込むべき。</p> <p>人材育成事業は、対外的に活躍する人材に限らず、地域課題の解決に資する人材の育成も必要。また、人材育成の対象は若年層にとどまらず、中高年層にも拡大して生涯現役社会を目指すような施策を展開すべき。</p> <p>北海道は、国土領海 自然環境 人材知見 をはじめ豊かな資源に恵まれている。足りないのは【長期のビジョン】と【変革への覚悟】ではないか。開道 150 年を機に、恒常的な【開道 200 年（2068）プロジェクト】を立ち上げ、誰もが住みたくなり旅したくなる、生産性と幸福度の高い、北海道の創生に着手することを提案する。</p>
その他	<p>特に人材育成事業の分野では知事部局と道教委の間で縦割りが生じやすいため、しっかりと連携して取り組んでいただきたい。</p> <p>北海道議会庁舎の建て替えが検討されているが、道民の間では建て替えの是非について異論もあることから、本事業を政治利用して建て替えを正当化したり、カモフラージュするようなことは控えていただきたい。</p> <p>松浦武四郎の北海道探索の道筋や島義勇たちが函館からたどった道筋をいま一度明らかにするため、舞台やドラマ・映画などを制作して欲しい。</p>

基本方針（原案） 掲載箇所	ご意見の概要
その他	<p>北海道 150 年事業として、将来、世界を担う若者を北海道に参集してサマーセミナーを開催することを提案する。</p> <p>若い時に北海道（日本）の文化、風土に直接触れ、自分の目で見ることにより北海道（日本）のよき理解者になり、それぞれの立場で北海道の魅力を世界に発信することも期待できる。</p> <p>医療観光は今の中国ではとても需要がある。爆買いが終わりそうになってきた今だからこそ、観光資源として必要だと思う。観光は浮き沈みが大きいので、中国だけではなくアジアなどの観光客の国々の社会保障を兼ねた医療観光は、一つの国が来てくれなくても安定的に観光事業が続く。</p> <p>心が辛い人達の療育にかねて、捨て犬、捨て猫の支援の就労支援ができたらと考えている。癒しの観光として、見える観光資源だと思う。</p> <p>北海道新幹線ルートについて 提案：新函館北斗－七飯大沼－鹿部－室蘭－苫小牧－千歳－札幌 噴火湾海底トンネル</p> <p>北海道 150 年に向けて、道民の意見の集約は、道と道民が共に取り組める最初の機会として大変意味のあることだと感じたが、一つ疑問に感じる点は、意見集約の実施や、基本理念の「自分達の力で創っていく気概を持ち」という意識が道民にどこまで伝わっているのかという点。</p> <p>これから取組が具体的になっていく中で、北海道を愛する多くの方が関心を持ち、自ら参加するためにも、現時点での種まき（発信力の強化）や様々な企業・団体との連携が必要不可欠だと感じている。</p> <p>道民がより参加しやすく、一人ひとりが北海道のことを考える機会をさらに多くの人たちを巻き込んで取り組んでいくことが大切なのではないか。</p> <p>北海道は日本の食料基地としての役割を果たしている中、「食・観光」に関する取組を重要視すべきではないかと思われる。</p> <p>また、150年の歴史の中で培ってきた食の歴史はもとより、未来に貢献する事業へのサポートや支援の拡充が最も必要ではないか。</p> <p>松浦武四郎の生誕 200 年、北海道 150 年に向けた武四郎のドラマ化実現に努力すべき。</p> <p>北海道 150 年文庫の編纂を提案する。</p> <p>北海道 150 年事業は、北海道のこれまでを受け継ぎ、次の 100 年 150 年に受け継ぐことが理念。時系列は、アイヌの歴史、江戸末期から明治期、対象、昭和終戦前、終戦後、そして未来へのシーズ。基本テーマは「北海道の人々の営みと北海道の自然」1 テーマ一冊として順次刊行。</p> <p>名称は「北海道歴史未来文庫」。各巻のテーマとエピソードは広く公募とする。</p> <p>一冊は 20 頁程度の読みやすい分量とし、専用 WEB サイトを設置し自由に閲覧できるとともに、国内外から各エピソードに関する情報提供を求め、エピソードを深化させる。</p> <p>事業案は「何をもって」基本理念・テーマ・姿勢のベースとしているのか、明確ではない気がする。</p>

基本方針（原案） 掲載箇所	ご意見の概要
その他	<p>北海道には北海道なりの和人と蝦夷=アイヌとの「共存」と「争い」の長い歴史があるが、道民は「北海道には歴史がない」といって明治維新以前のことをあまり知らない。そんな状態では歴史や文化を次世代に伝えることはできない。そのため、「記念セレモニー」企画ベースに、「歴史から未来を学ぶ」コンセプトで「市民カレッジ」の拡大版のようなシンポジウムを開催したらよいのではないか？</p> <p>時系列ではなく、テーマ別にして全10回ぐらいのシリーズとし、これまでの歴史と今の北海道の文化や産業などとリンクさせるような内容をテーマとして開催し、道民は深い歴史を理解し、今まであやふやだった道民としてのアイデンティティを持ち、北海道に根差した未来へヒントを見つけるためのスタート地点に立てるのではないか？それがあれば他の「記念セレモニー事業」への理解度も増し、「北海道みらい事業」は未来へのヒントを発展させる事業となり、「関連推進事業」は150年事業のレガシーになるという流れにすることが出来ると考える。そう考えると、幕末の人間である松浦武四郎がキーパーソンにしすぎると、取り上げる北海道の歴史幅を狭めてしまうことを懸念する。またアイヌ文化推進は、やりたい人だけがやるような事業とした方がよいと思う。北海道の代表的な文化と位置づけ、道民全体で推進するような流れは、自分のルーツではない文化であるため抵抗を感じる。</p> <p>「北海道」の開基以来、北海道の産業・生活文化および北海道らしい景観形成の発展に寄与してきた出来事に「牧畜・酪農文化の展開」が考えられる。</p> <p>北海道 150 年の歴史の中で、一時は北海道の広範囲にわたり展開していた牧畜・酪農産業の足跡を、次の3つの視点から取り上げるアイデアを提案する。</p> <p>①歴史的視点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・北海道における牧畜・酪農産業の発展</li> <li>・大学機関と民間酪農家</li> <li>・北海道庁の各農場施設</li> </ul> <p>②食文化の視点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・牛乳と牛乳の加工品</li> <li>・北海道産のいろいろなチーズ</li> <li>・健康食品としての乳製品</li> </ul> <p>③景観的視点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・サイロについて（模型をつくる）</li> <li>・腰折れ屋根（ギャッパル屋根）畜舎について（精巧な模型をつくる）</li> <li>・北海道らしい酪農景観の観光への活用</li> </ul> <p>EX.酪農景観めぐり、フットパス、乳製品やチーズ料理を食べる</p>

基本方針（原案） 掲載箇所	ご意見の概要
その他	<p>私は 2018 年から東京オリンピック 2020 までの 3 カ年を「北海道みらい事業」の実施期間に位置付けてはと提案する。基本姿勢の「未来志向」「価値創造」「道民一体」にはそれなりの時間がかかるのと、「世界の中の北海道」という視点は観光はじめ、これからの北海道にとっては欠かすことの出来ない方向性。とすれば 2019 ラグビーワールドカップは北海道にとって重要な交流機会を生む。ラグビー強豪国はいずれもバードウォッチングやアウトドアの盛んな国々であり、札幌予選の来客を探鳥ツアーで道東へ。北海道の鳥タンチョウをシンボルに北海道をアピールする絶好の機会である。</p> <p>現在 2 年に一度行われている「開拓神社大みこし渡御」は、以前は 3 年に一度大みこしをクレーンとトラックで開拓神社から三越前まで運び、三越前からすすきの交差点前までの間を道内外の神輿会の担ぎ手によって渡御していた。</p> <p>和っしょい北開道は、平成 16 年に故坂本眞一氏（元 J R 北海道会長）が中心となって結成され、それまでみこしに触ることさえ難しかった一般市民にみこし渡御に参加する道を開いた。</p> <p>まつりとみこしには人と人とをつなぐ力がある。とりわけみこしを担ぐと、自ずと担ぎ手に感謝する気持ちが沸き上がる。また、みこしを曳き、担ぎ、みこしに触れることは、先人の不屈の努力に思いをはせる機会になると考える。</p> <p>北海道 150 年は、知事が仰っているとおり、道民が「先人が積み重ねた努力・歴史を振り返り、次の 50 年につなげる」スタートを切る年になる。北海道がこれまでも、そしてこれからも、人と人とのつながりがどこよりも強い大地として発展するために、「開拓 150 年記念大みこし渡御」を実現したいと考えている。</p> <p>みこし渡御当日の夜には、「開拓 150 年記念大花火大会」も開催してはどうかと考えている。</p> <p>150 年の節目の「開拓 150 年記念大みこし渡御」と「大花火大会」を開拓以前からの先人であるアイヌの人たちとともに祝いたいと考えている。</p> <p>和っしょい北開道は北海道の未来が世界に誇りうる信頼と感謝に満ちた人がつなぐ力にあふれた大地となるために全力を尽くす。</p>